

俳句教室 令和六年度学園祭展示作品

福袋開く孫子のえびす顔

瀬端 花野

新年には家族が集まります。長女親子は毎年福袋を買うのを、楽しみにしています。何が入っているのかワクワクしながら袋を開く二人の様子に、見ている周りも幸せな気持ちになります。にぎやかなお正月の一コマです。

家族みな真つ新タオル初湯かな

小林 かづ

満州からの引揚者の私達一家の生活は慎ましいものでした。新しい年を迎える晴れ着は無論履物の新調も叶わぬ事でした。亡き母がせてもの思いから揃えてくれた家族五人の真新しいタオルの記憶です。

七種は揃はぬ粥の椀温し

横須賀 智

正月七日は七草粥。今日「春の七草」全てを揃えるのは難しい。勿論 商魂逞しいお店ではパックになって売っている。しかし、ほとんどの草は青臭く食べにくい。そこで口あたりの良い蕪、大根、小松菜等で済ませている。ものぐさな私らしいではないか。

梅一輪玉ねぎ微塵の香に勝る

田中 京

梅が二、三輪咲きました。一輪開いたのを剪って台所と居間の間のカウンターに活けました。夕食の用意で玉ねぎの微塵切りを始めると、目が涙で霞んで来ました。顔を上げると梅の花の良い香りがしていて、たった一輪でも頑張ってくれていると感心しました。

ヒメイカとふんはり泳ぐ春の藻場

福島 恵秀

アマモ場でベテランダイバーの先輩がヒメイカを見つけました。ヒメイカは二センチほどの小さなイカです。藻場をふわりふわりと泳ぐ映像はかわいらしく感動しました。東京湾で激減してしまった藻場を、復活させようと活動している会に参加していた時の思い出です。

田植歌のどかにひびく千枚田

西野 信

田植え、稲刈と機械化が進んでも、傾斜地の多い地区では棚田の占める割合が重要で、人手に頼る他は無い。特に田植え時は、水を張り苗代から田植えにと作業するのに思わず田植歌が飛び出すことになります。静かな情景の中にそれが響きわたり長閑さを感じさせます。

黒もじを添へて独り居柏餅

長澤 とう子

若い家族は五月晴れに飛び立つばかりに出掛けて行きました。私はひとり、毎年好きな店の柏餅をゆつくりと味わいながら、端午の節句を祝う様子を詠みました。

風薫る寝付く美男は母の背に

藤田 笙

買い物に出かけた折に今時には珍しいおんぶ紐の母子とすれ違った時の句です。すやすやと眠っている赤ちゃんは五月の爽やかな風と同じくらいすつきりとした美男でした。

薫風や土手道はるか舎人線

羽鳥 ゆき

さわやかな薫風の中、土手道を歩いているとはるか向うに、隅田川に架かった橋の上を舎人電車が走っているのを見ました。まるで絵本の中の光景のようで感動しました。

涼風や大樹を走る水の音

森戸 謡

吟行で新宿御苑に行った。直径一メートルもあるかと思われる百合の木の下で皆で涼をとっていた。かわるがわる幹を抱え耳を付けてみた。聞える。サーサーサーと水の流れるような音が・・・本当なんだ。と、とても感動した。

貨車の音の遠く響くや夏座敷

中島 がりゆう

今では空港もでき、成田山新勝寺へ向かう参道にはいたる所にローマ字も見られるようになった。しかし田園風景残る昭和四十年頃の成田の思い出は、遠く貨車の音が響いて来るのである。

素戔雄の夏のみこしに初参加

長岡 ゆきえ

祭りに行き素戔鳴のみこしを生まれて初めて見て感動して俳句に詠んでみました。

初七日や母の遺影と秋団扇

戸塚 和夫

母の初七日に仏壇に手を合わせていると、母の遺影の下に生前母が使っていた団扇が片付けられずに残っていた。その時の寂しい記憶を詠みました。

桔梗や源氏の君の立つごとし

塩崎 みつえ

小石川後楽園に吟行会で行った時のこと、園の中に濃い紫の桔梗が、一株咲いていました。あまりにも美しく凛々しく、光る君の姿が想像され感動しました。その時の一句です。

夕暮の山路に咲くや月見草

丸山 ふみ子

私が十三歳の頃、戦争中で、両親の古里へ疎開して居ました。学校の休みの時は、両親の借りている畠に肥料の一部として、茅などの草を刈り、入れていました。そうした時に見かけた景色です。

満月や揺れる波間に光る道

斎藤 和夏

一歳半の孫一家と海辺のホテルに行きました。ふと、深夜目覚めると、ベット脇の窓から眩い光が……。『今日は満月!!』じっと目をこらして海を見つめました。すると、キラキラと月から続くかのような道があるではありませんか! 暫く俳句の世界に浸りました。

身に入むや八十路の引つ越しあれやこれ

山口 昌

八月末に引つ越しをして体も心も疲労困憊したあげく、転倒し左手首を骨折した時のかなしい気持ちを書きました。

金木犀茂る葉密に漂ふ香

安部 洋輝

秋になって、金木犀から花は未だ見えないのですが、香りがほのぼのとしてきました。ああ秋だなあと思っていた数日後、密の葉の中に黄色の花が咲き誇り、香りが広く漂ってきて驚きました。今年は温暖化で花がたくさん咲いてくれ、嬉しくなりました。

落葉搔いちようの山に子がダイブ

谷川 よし

上野公園での秋の休日、綺麗に掻き集めたいちようの山に、子供たちがうれしそうに、歓声をあげながらダイビングする様子を詠みました。

舞ひ下りる木の葉時雨の音清か

斎藤 文

掃き清められた小石川植物園の、コンクリートの急坂を上って行く時の情景です。風が吹く度に、大木から木の葉が舞い下りて来ます。さやさやと、まさに時雨のような清かな音に聞こえました。

鮫鯨の湯がく香りに父の顔

浅賀 郁子

父は鮫鯨が大好きでした。時季になると捌いてもらった鮫鯨を大鍋で湯がき、小分けし冷凍したものがなくなるまで夕飯は鮫鯨鍋でした。湯がくときの香りは魚とは思えない、いい香りです。私は最後にくたくたの餅を食べるのが好きでした。